「成吉思汗与六盤山国際学術研討会」参加報告

舩田　善之

2007年7月21日から23日まで、寧夏回族自治区固原市において、国際会議「成吉思汗与六盤山国際学術研討会」が開催された[1]。この会議は、チンギス＝ハン逝去から780周年を記念して、固原市人民政府・寧夏社会科学院・中国元史研究会・中国蒙古史学会が主催したものである。1227年、チンギス＝ハンが西夏遠征中に没した六盤山の北麓に位置する固原市が開催地として選ばれ、六盤山一帯の観光開発・振興と連動する形で、現地の政府・関係機関の肝いりで企画・実行された。会議の運営機関（承辦単位）には、寧夏六盤山旅游扶貧試験区開発建設管理委員会・寧夏社会科学院歴史研究所・涇源県人民政府・原州区人民政府・固原市旅游局・固原市地方志辦公室・固原市六盤山林業局・寧夏固原博物館が名を連ねている。

会議の席上では『成吉思汗与六盤山国際学術研討会論文集』が配布され、47篇の報告論文が収められていた。最終的には100名以上の参加者と60篇近くの提出論文があったとの由である[2]。海外からはモンゴル国・韓国・日本からの参加者がおり、日本からは井黒忍氏（日本学術振興会特別研究員、大谷大学）・山本明志氏（大阪大学大学院博士後期課程）と舩田の三名が参加した。開催時期がちょうど大学など高等教育機関が夏休みに入った時期に重なったため、参加を予定した研究者が鉄道チケットを確保できずに参加をとりやめたケースも少なくなかった。山本氏は当時天津の南開大学に留学中であったが、やはり鉄道チケットを購入できなかったため、長距離バスを西安経由で乗り継ぎ、最後はタクシーで固原入りする強行軍をとらざるを得なかったとのことであった。

写真１：開幕式

開会前日の7月20日がレジストレーションに充てられ、筆者は調査を同行していた杜建録氏（寧夏大学教授）・井黒氏とともに、蘭州から車輌にて固原入りした。蘭州・固原の直通バスがなかったため、甘粛省古籍文献整理編訳中心の方々のお手を煩わせることとなった。この場を借りて深甚の謝意を表したい。県城外の丘陵の上に位置する瀟

[1] 中国で発表された参加報告に孫穎慧「成吉思汗与六盤山国際学術研討会綜述」『寧夏社会科学』2007年第5期、104-109頁がある。
[2] 孫穎慧「成吉思汗与六盤山国際学術研討会綜述」、104頁。

洒なペンション風ホテルの古雁山荘が会場であった。夕刻から歓迎宴が催された。西北地域で開催される国際会議がホスピタリティ豊かな宴会を重視する慣例はここでも破られず、乾杯のかけ声と歌声が絶え間なく続く中、参会者は親交を深めることができた。

翌 21 日午前、開会式（**写真１**）・記念撮影の後、全体大会が開催された。陳育寧、邱樹森、李治安、薛正昌、余軍各氏及び筆者の六名が研究発表を行った。

写真２：六盤山紅軍長征紀念館から眺望した六盤山麓

昼食後、車輌に分乗し、国際会議の主題でもある六盤山（**写真２**）を目指してエクスカーションに出発した。第一の訪問地は、2005 年 9 月 18 日に落成した六盤山紅軍長征紀念館であった。六盤山の主峰にそびえる巨大な建造物は、昨今の観光開発における「紅色旅游」の位置を象徴するかのようであった。続いて、六盤山腰の道路を分け入って峡谷にたどり着く。チンギス＝ハンが避暑のために訪れたとされる涼殿峡である。ここで参会者の題名も刻された「成吉思汗与六盤山国際学術研討会紀念碑」の掲碑式典が挙行された。民族衣装をまとったユグル（裕固）の人びとが式典に華を添えた。終了後、涇源県城郊外に位置するホテルの涇河源山荘にチェックインし、涇源県人民政府主催の晩餐会。終了後、県城内の文化広場で「回郷風情文芸演出」を参観した。

22 日の午前中もエクスカーションに充てられた。朝食後、県城西北の香水峡に位置する自然風景区の野荷谷へ。散策後、固原への帰路につく。途中、安西王府遺址（開城遺址、**写真３**）を参観した後、古雁山荘に帰着。

写真３：安西王府遺址（開城遺址）

午後、まず全体大会第二部が開催され、朱耀廷、呉忠礼、宝音徳力根、牛汝極、陳建勤各氏による研究発表が行われた。休憩後、第一部会「成吉思汗与六盤山」・第二部会「元代歴史文化」に分かれて学術討論が行われた。筆者は第二部会に出席した。座長は、楊富学氏が務め、冒頭で列席者全員が自己紹介を一通り行ってから、和気藹々とした雰囲気の中で学術討論が行われた。

23 日午前もエクスカーションに充てられた。秦長城を踏査した後、固原市博物館を参観。昨日現地を視察した安西王府遺址出土品が目を惹いた。北朝・隋唐の墓誌などを展示している碑廊が当時開放されていなかったのは残念であった。再び古雁山荘へ戻り、閉幕式。まず、劉迎勝氏の基調報告「元和元以前亜洲的双語字典編纂伝統——従《双語辞典学導論》談起」がなされ、続いて二つの部会の総括を朱耀廷・楊富学両氏が行った。閉会後、多くの参会者は主催者が準備した車輌で銀川への帰途につき、一部の参会者は固原から直接帰途についた。筆者は井黒氏とともに、平涼・涇川・乾県を調査しつつ、西安まで安西王の季節移動のルートを辿ることとした。

最後に、この国際会議について簡単に総括したい。学術報告で強い印象を残したのは、現地の考古研究者である余軍氏による関連史跡の報告「寧夏固原開城元代“安西王府”遺址」であった。本会議の主題の核心に最も迫る内容であり、エクスカーションを控えた参会者にとって非常に有益であった。牛汝極「従成吉思汗及其家族的宗教政策看内蒙古的景教遺存」も、新出史料をふんだんに用いた刺激的な報告であった[3]。そのほか、山本明志「元代蔵漢交通的駅站路線与臨洮」は、日本の堅実な実証研究を披瀝するものであった。また、孫継民・陳瑞青・井黒忍の各氏はハラホト漢語文書に関する議論を行い、今後のハラホト漢語文書研究の展開を十分に予感させた。

本会議は、中国ではよく見られる形式の大規模な国際会議であった。よく言われるように、特定のテーマについて深く議論することよりも、大規模な国際会議を開催することに目的があるとの印象は免れない。実際、主催者側は必ずしも参会者に「チンギス＝ハンと六盤山」という主題に直接関連する報告を要求していない。その結果、筆者の報告論文も含め、主題に直接は関連しない報告が大半を占めることとなった。また報告された論文数も多く、結果玉石混淆であったといえるが、これは大規模な国際会議のメリットでもありデメリットでもあろう。他方、モンゴル時代史にとっても、本会議が開催された固原市と六盤山は非常に重要な地域である。エクスカーションでこれら重要な史跡と文物を実見できたことは参会者にとって貴重な経験となった。望蜀の言になるが、会期の三日間全日に学術会議とエクスカーションが組み込まれており、若干落ち着かないスケジュールであった。会期の前半・後半にそれぞれ分けて行った方が、参会者もそれぞれに集中できたように思われる。もちろん、こうしたスケジュール設定にはやむを得ない事情があったものと拝察する。

中国で開催される国際会議の魅力と意義は、歴史上重要な地点に多くの研究者が会同し、学術交流を深めることができる点に集約される。本会議の開催・運営に尽力され、このような機会を提供し、会議を成功に導いた方々に敬意を表したい。

（ふなだ　よしゆき、九州大学）

[3] 最近氏の研究成果が、牛汝極『十字蓮花——中国元代叙利亜文景教碑銘文献研究』上海：上海古籍出版社、2008 年としてまとめられた。